

寸劇 「軽井沢の重い恋」

芥川龍之介

片山廣子（堀辰雄の「聖家族」のモデル母子）

ナレーション

『或阿呆の一生』は、芥川龍之介の最後の作品。これを書き上げて自らの命を絶ちました。そのなかに「彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した」とある女性が片山廣子といわれています。年の差は14歳もありながら、心の深い交流をした二人は、余り語られることはありません。きょうは、そんな二人の出会いをお互いに発表した短歌を味わいながらみてみましょう。

廣子 お手紙を書きました。東京での観劇もお食事も楽しかったし、お話は尽きないのですけれども、わたしはあの方より14も年上で、二人の子供も思春期を迎えて難しいときです。だからこう書いて送りました。

「わたくしが女でなく男かあるひはほかのものに、鳥でもけものでもかまひません。が女でないものに出世しておつきあひはできないでせうか」

芥川 まことあの女史は、他の女にはない魅力に溢れている。才気というか、広い知見というか、アイルランドの文学を翻訳している松村みね子と歌人の廣子と一見は違うようにみえて、深いエネルギーを発しているのだ。また会いたいものだ。

廣子 こんな歌を詠みました。

-いづくにか別れむ路にいたるまで
共に行かむと思ひ定めぬ-

-くれなゐのうばらの花に白う咲けと
のたまはすなりせまきみこころ-

-わがむねにみなぎる力このままに
注ぎいるべきうつろのあれば-

「翡翠」より

芥川 おたがい、文学の人間だから、ふつうの恋は出来まい。されば、俺も歌で返すべきか。旋頭歌「越びと」二十五首を与謝野晶子先生にお送りした。

こう書いて送った。「旋頭歌を少々御覽に入れます。御採用下さるのならば明星におのせ下さい。落第ならば御返送下さつても結構です。小生自身には大抵落第してゐる歌ですから。」大正14年2月14日の与謝野晶子宛書簡

あぶら火のひかりに見つところ悲しも、
み雪ふる越路のひとの年ほぎのふみ

うつけたるころをもちて街ながめをり。
日ざかりの馬糞にひかる蝶のしづけさ

片山 施道歌とは古代歌謡でももっとも古い歌体。五七七を繰り返して唱和し、恋を相聞する。そして五七七だけなら片歌。そんな切なさを込められている。こんな歌も詠まれていると、かの方は、こころ優しいお方。なぜに自分をそんなに苦しめなさるのか、わたしにできることのあれば・・・

芥川 要するに、状況の問題だ。恋の問題ではない。すれ違うことでエネルギーを発するのかもしれないぞ。深入りするまでもない。互いのエネルギーが生きる駆動の力となれば・・・

片恋のわが世さみしくヒヤシンス
うすむらさきにほひそめけり

恋すればうら若ければかばかりに
さうび
薔薇の香にもなみだするらむ

廣子

きょう夫がなくなりました。21で嫁ぎましたわたしも42になりました。こどもたちも自立し、たったひとり残されました。でもこころはなににも変わっておりません。魂の世界は、現実の転変とは違う軌道にあるらしいのです。

馬込のほうへ散歩にいったときに、結婚ってなんだったのかしらって、思いました。もう「こころの縛り」を捨てられるのだと、弁天池の底へ結婚ゆびわを放り込んできました。

廣子

きょう芥川先生がおなくなりになりました。夫がなくなってもう7年もたちます。天から文章を書くように降りてこられ、もういいと思われたら、自ら戻っていかれたのかもしれませんが。この軽井沢山荘の夏、苦しみ喜び、すべてをなつかしく、そして愛しく思うこのごろです。これからはしずかに翻訳の日々をおくりたいものです。



越びと 旋頭歌二十五首

芥川龍之介

一

あぶら火のひかりに見つつこころ悲しも、
み雪ふる越路のひとの年ほぎのふみ。

むらぎものわがこころ知る人の戀しも。
み雪ふる越路のひとはわがこころ知る。

現（うつ）し身を歎けるふみの稀になりつつ、
み雪ふる越路のひとも老いむとすあはれ。

二

うち日さす都を出でていく夜ねにけむ。
この山の硫黄の湯にもなれそめにけり。

みづからの體温守（も）るははかなかりけり、
静かなる朝の小床（をどこ）に目をつむりつつ。

何しかも寂しからむと庭をあゆみつ、
ひつそりと羊齒（しだ）の巻葉（まきば）にさす朝日はや。

ゑましげに君と語らふ君がまな子（ご）を
ことわりにあらそひかねてわが目守（まも）りをり。

寂しさのきはまりけめやこころ揺（ゆ）らがず、
この宿の石菖（せきしやう）の鉢に水やりにけり。

朝曇りすずしき店（みせ）に来（こ）よや君が子、
玉くしげ箱根細工をわが買ふらくに。

池のべに立てる楓（かへで）ぞいのちかなしき。
幹に手をさやるすなはち秀（ほ）をふるひけり。

腹立たし君と語れる醫者の笑顔（ゑがほ）は。
馬じもの嘶（いば）ひわらへる醫者の齒ぐきは。

うつけたるところをもちて街（まち）ながめをり。
日ざかりの馬糞（ばふん）にひかる蝶のしづけさ。

うしろより立ち來る人を身に感じつつ、
電燈の暗き二階をつつしみくだる。

たまきはるわが現（うつ）し身ぞおのづからなる。
赤らひく肌（はだへ）をわれの思（も）はずと言はめや。

君をあとに君がまな子（ご）は出でて行きぬ。
たはやすく少女（をとめ）ごころとわれは見がたし。

言（こと）にいふにたへめやこころ下（した）に息づき、
君が瞳（め）をまともに見たり、鳶いろの瞳（め）を。

三

秋づける夜を赤赤（あかあか）と天（あま）づたふ星、
東京にわが見る星のまうら寂しも。

わがあたま少し鈍（にぶ）りぬとひとり言（ごと）いひ、
薄じめる蚊遣線香（かやりせんこ）に火をつけてをり。

ひたぶるに昔くやしも、わがまかずして、
垂乳根（たらちね）の母となりけむ、昔くやしも。

たそがるる土手の下（した）べをか行きかく行き、
寂しさにわが摘みむしる曼珠沙華（まんじゆしやげ）はや。

曇り夜のたどきも知らず歩みてや來（こ）し。
火ともれる自動電話に人こもる見ゆ。

寝も足らぬ朝目に見つついく日（ひ）経にけむ。
風きほふ狭庭（さには）のもみぢ黒みけらずや。

小夜（さよ）ふくる炬燵の上に颯（あご）をのせつつ、
つくづくと大書棚（おほしよだな）見るわれを思へよ。

今日（けふ）もまたこころ落ちみず黄昏（たそが）るるらむ。
向うなる大き冬木（ふゆき）は梢（うら）ゆらぎをり。

門（かど）のべの笹吹きすぐる夕風の音（おと）、
み雪ふる越路（こしち）のひともあはれとは聞け。

上記の旋頭歌25首「越びと」の本文は、
『芥川龍之介全集』第9巻（岩波書店、1978年4月24日第1刷発行
・1983年1月20日第2刷発行）によりました。